

いつでもだれでも安心してかかる 歯科医療の実現を！

今年春の大学入試の結果、全国に17ある私立歯科大学のうち11大学で定員割れとなり、昨年よりもさらに深刻さを増していることがあきらかになりました。歯科衛生士学校や歯科技工士学校では募集停止や閉校に追い込まれるところがさらに増えています。もはや、歯科医療は若者にとってまったく魅力がなくなっていると言っても過言ではありません。なぜ、こんなことになったのでしょうか。

一つには、歯科の診療報酬が長い間、低水準に据え置かれてきたことなどの問題があります。診療報酬は歯科医院の経営を支える基本的な収入ですが、これが低ければ、必要な医療器具を揃えたり、古い設備等を更新したり、医療スタッフを十分な待遇で雇用することなどは非常に困難になります。今年2月のテレビで報道された中国製歯科技工物の問題も根本にあるのはその技術に対する相応の報酬が得られていないということです。2010年改定で、形の上では2%ほど引き上げられましたが、実際には患者さんが減ったこと等もあって経営改善には繋がっていません。そのため、歯科医師の2割が、「生きがい」を感じておらず、4割が「子どもを歯科医師にしようと思わない」と考えているのです。

二つには、日本経済の状況が非常に低迷しているため、患者さんにとっては医療を受ける際の窓口負担が非常に重く感じられるようになって、受診を控えたり治療を中断したり必要な検査を拒否するという事態が広がっているということがあります。これは、東京歯科保険医協会などの調査で分かったことですが、高い窓口負担が患者さんには辛い思いをさせ、医療機関には経営の困難をもたらしています。

こうした中で、私たちは「保険でより良い歯科医療」を実現しようと、歯科医療について考えるシンポジウムや「イイハデー」などの活動などに取り組んできました。これからも、保険証一枚でいつでもだれでも安心して歯科医療が受けられるような制度の実現をめざし、多くの団体や個人とともに運動をつよめていく決意です。

右、決議します。

2010年12月12日

「保険でよい歯を」東京連絡会 第18回定期総会